

第5部会

それ以来教会敷地内の一室に住み、典礼を司る一方、崇敬者として彼のもとを訪れる人々にバラカ（祝福）を与えている。

アブナー・インジールウスは、あるときから悪魔祓いができる司祭として有名になり、のちには彼のとりなし（シャファア）によって信徒たちの病氣治癒を中心にさまざまな奇跡が起こるとして、さらに多くの人々が彼のもとを訪れるようになった。現在は、通常のコプト教会同様金曜と日曜に行なわれる典礼を、彼とほぼ同じ時期に着任したもう一人の司祭アブナー・スレイマーンとともに司っているが、アブナー・スレイマーンは崇敬の対象とはなっていない。アブナー・インジールウスは、自分のもとを訪れる崇敬者たちには典礼以外の時間に應對する一方で、月のはじめには、修道生活に集中するため日曜午後から火曜までは隣県の修道院で生活する。妻帯者も多いコプト司祭のなかで、司祭を兼任しながらも頻繁に修道院を訪れ、清貧を守りながら共同体のためにも祈りをささげる彼の姿は、信徒にとって特別な存在として映る。

生者には正式な列聖がないなかで、アブナー・インジールウスを聖人たらしめているのは、人々の崇敬実践である。彼らがアブナー・インジールウスを聖人とみなす理由は、①修道士としての生活、②奇跡譚の二点に大別できる。彼は修道院という神への純粋な信仰を実践する場に属しながら、村の教会という世俗に開かれた場所にも属し、「聖」と「俗」の橋渡しをしている。世間の喧噪を離れ、神への献身と祈りに身を捧げ、人々に奇跡を起こし続ける修道士としてのアブナー・インジールウスの姿は、俗人には容易に到達できない理想的キリスト

教徒の在り方を示し、聖人としての崇敬を受けているのである。

クザーヌスにおける「神の名」の問題

島田勝巳

本発表では、ニコラウス・クザーヌスによる神の名をめぐる思索を、偽ディオニシオスの肯定／否定神学の枠組みに則って議論が展開されている *De docta ignorantia*（一四四〇）を中心に検討する。特にここでは、神の名をめぐるクザーヌスの議論に形而上学的基盤を与える「包含」と「展開」の理論、さらに「縮限」の理論の性格に注目しながら、それとディオニシオスの神名の階梯論との違いを明らかにしたい。

クザーヌスにとって、理性によって与えられる名称は、不可避的に区別 (*discretio*)、あるいは対立 (*oppositio*) をもたらさざるを得ないものである。したがってそれは、一切の対立から自由な神には本来的に適合し得ないものとされる。だが一方で彼は、「二性」 (*unitas*) については、そうした対立関係にもたらされない、神に適合するものとしても語っている。しかし、こうしたクザーヌスの両義的な視点はいくつ矛盾するものではない。その背後には、彼が神と被造物の形而上学的連関を規定する際に用いた「包含」 (*complicatio*) と「展開」 (*explicatio*) という理論的基盤がある。

クザールヌスによれば、神はその一性において万物を包含する一方で、その神の一性は事物の多性において展開する。つまりクザールヌスは、万物の包含としての神を「固有で語り得ない名称」とする一方で、さまざまにあり得る肯定的名称を、その固有の名称によって包含されているものの展開として捉えている。このように、包含と展開の理論は、クザールヌスの神名論の形而上学的基盤をなすものとして見ることができる。

クザールヌスにおける神の名の議論が包含と展開の理論をその基盤として持つということは、その枠組みが彼の肯定／否定神学を理解と密接に関連していることを意味する。実際に彼は、「肯定神学」は必然的に「否定神学」によって補われる必要があるとしているが、その理由を、包含と展開の理論から与えている。つまり、一方では、いかなる宗教においてもその礼拝は必然的に神についての積極的な肯定によって基礎づけられねばならないが、他方では、似像そのものが真理と取り違えられる「偶像崇拜」(idolatry)を避けるためにも否定神学は不可欠とされる。こうした見解は、基本的にはディオニシオスの枠組みをほぼ忠実に踏襲するものだが、ディオニシオスが神名の議論においてその形而上学的前提とした階梯論的枠組みと、クザールヌスの神の名の論点には、明確な違いが認められる。

クザールヌスには、包含と展開の理論を補足するものとして「縮限」(contractio)の理論があり、そのプロセスは確かに「自然の秩序」(ordo naturae)を背景とした段階的なものとして描かれている。だがそれは、神名の位階としての意味を持つものではない。むしろそれは、神と宇宙、さらには個々の被

造物の形而上学的連関を説明する理論的枠組みとしての意味を持つものである。

クザールヌスにおいてそうした視点が可能となるのは、彼が神を、自然の秩序の頂点に位置するような存在として捉えてはいないためである。彼にとって神とは、空間的な比喻において、宇宙の縮限の諸段階の上に、それらを超越してあるような存在ではない。むしろ「神は、宇宙と個々のものの始めであり中央であり終わりであるので、万物は、上昇しようと、下降しようと、中央に向かおうと、いずれにせよ、神に向かつていく」のである。こうした神の觀念に立てば、神名の階梯であれ自然の秩序であれ、神を指して登り詰めるべきものとしての梯子、あるいは階梯はその必要性を失うことになる。神との類似に従って階梯を段階的に登りつめるというディオニシオスの神名論の、またその流出論的な肯定／否定神学の性格そのものが、クザールヌスにおいては変容を余儀なくされるのである。

永遠についての瞑想

——時間と永遠をめぐる神学的哲学的考察——

福 嶋 揚

過去と現在と未来から成り立つ時間は、人間の実存形式であるが、同時にその実存の統一性と同一性を脅かすような、いわば非形式でもある。時間は死と同様に、人間の生命の不可欠の